





狭衣下細第一

以下ひもとふさぶるもの抄をあらうこれ抄乃
 わりより中上落の物ごころを所のめ終る中
 色を帯れあやまり紙うけをゆまうことわり
 多しうあうゆるあくとまらるるべしとあはじ
 くは古本をみるにんもことまらるるべしとあはじ
 ぶゆくりすきなす乃神垣ちりき普賢堂の傍
 庭りちうく紙合て造當れ紙をん紙乃紙
 ね底り下細と外紙又あ家双紙をん紙乃紙
 乃あうへ紙と懐ししてんりを中紙
 光原氏乃物造のん見解あをび抄又とようぶ



あべ

河輔

右大臣 源氏物語

伊弉

謙徳云一修 源氏物語

兼通

大政大臣忠義云

今上 源氏物語

境中納言

紙巻守 源氏物語

為時

源氏物語

左大臣 源氏物語

左大臣 源氏物語

大納言

源氏物語

一は物終を源氏物語に記し多也又高方の大将
院ちとに似たり又花山法皇或ハ宇多御門
守王御孫と云なりし時持一終ひを云

源氏物語の源氏物語ト云ひく 源氏物語

源氏物語ト云ひく 源氏物語

源氏物語ト云ひく 源氏物語

源氏物語ト云ひく 源氏物語

源氏物語ト云ひく 源氏物語

源氏物語ト云ひく 源氏物語

源氏物語ト云ひく 源氏物語

源氏物語ト云ひく 源氏物語

と云ふちりし
申傳の故まこと引ひ友ともふふそそははききううららままをを花はな
花はな松まつりりととののももととあありりひひくく心こころうう那な一ひと古ふる尋もとれれて
ととままじじりり也なり

一ひとああそそ乃のここりりののままれれ池いけややああぞぞのの川かわせせににううふふ
らん岸きしのの山やま吹ふくくももととあありり源みなもとの氏うぢ胡こ蝶てつ卷まきのの侍しやく
一ひと侍しやく童どう同どうああ

一ひと源みなもとの氏うぢ文ふみささ夜よののりりとと堀ほり川がわ大おほ長なが乃の上のうへ八や斗とんん帝ていれれ
侍しやくののままじじりり也なり故ゆゑ文ふみあありりままりりままりりありありあ
のの後のち大おほ長ながれれ比ひ治ぢりりととささ夜よ乃のはは母はは也なり申まを納な云い申まを納な
ハ源みなもとの氏うぢ文ふみ乃の文ふみ女むすめ也なり

一ひとそそひひかかををせせ二ふた人にんのの文ふみ女むすめ也なり

一ひと源みなもとの氏うぢ後のち一ひと条じょう院いん也なり

一ひと若わかのの志こころ多おほしし級きゅう字じ也なりくくここららふふととよよりり級きゅう照しょう
やや片かた思おも乃の乃の也なり

一ひと花はなをを花はなれれとと美み多おほ乃の尋もとああるる人ひとししげげ初はつめめくく
定さだ都みやこ也なり引ひみみあありりままのの書かき山やま吹ふ乃の花はなもも花はな
の中なか一ひとりり吹ふくくたたれれ

一ひとららちちあありりあありりとと引ひ山やま吹ふのの花はな文ふみ女むすめ也なりややををたたれれ
とといいふふととあありりままののららちちあありりあありりてて

一ひと出でるるとと申まを納な云い美み多おほ也なり

一ひとつつららふふせせんん尋もと大おほ將しょう乃の山やま吹ふくくとといいふふ人ひと

一 梵網經のついでに引まの梵網經を引れば中にも
 我を梵網經のついでに引まの梵網經のついでに引れば中にも
 梵網經二卷 花嚴經の結經也 一見於女
 人 独失眼 功德 花嚴經文 二尊院也 国正月廿
 九日は尋らる梵網經のついでに引まの梵網經のついでに引れば中にも
 下卷也 又尋これの上卷なり 五之三と
 一 翠のついでに引まの梵網經のついでに引れば中にも
 一 お免わること 隆徳日本紀下卷中一五之天雅彦
 一 源氏文 先帝の圓融院 内親王の母中納言坊
 さ衣の法母元女まきのの法めの也

一 中將乃同いごとく 中將の申もあまのついでに
 一 お免わること 隆徳日本紀下卷中一五之天雅彦
 一 源氏文 先帝の圓融院 内親王の母中納言坊
 さ衣の法母元女まきのの法めの也

又引くも一していふはくはよのひのひよりあつ
きあゝのたき 是の城引

一志のふもぢかき ちぢかきわんわんまき

一思ふもくぐー
一太神おかしとて 大政大臣のほむとめ 今暇あるまひ
路へ城ぢ一築城ぢ入まひせんとも 終り
洞院の上六捨川のおもむれ水方

一まふたの後に築城 内と申の築院也

一申おのきりうらまらん出路のみまらう 高瀬の

よさげぬ懸乃おのちもれ也

一十帝の里 十帝は別よらる 十帝は別よらる

一うかもむと 高瀬ありて持くわがわらもれ

一あも也 あも 陸路よりあつていへりて申りていへり

一とと 進梯 ひそと 匠割はら也

一あゝいあてあがくも 陸路ちん答や一洞也

一あひのみちとが くるまあゝひと大将の力

とばしてあせりあゝ洞也

一あふと かえ 築 ありあてりて申り倍がす也

一まじがえ源氏あり口あてりて築つていへり

一ちと ち 築 源氏ゆがふの申りはあゝ

一あまが あま 女め 房ふ ども 陸路が力あてりていへり

一らる後のまらりてあゝいへり

さくらんぐし

大納言

南宮格申納言田巻一の大納言

又やんようをて申納言

進言ぬえお路ひ一人をえ乃大吏

左兵衛格申納言

内子也宣耀及内子格也

源中将 さき也

合奏もして独つもの

勅定也

中務

少将 笙の節

如志 弘徽及少将立寄の杖を如志の杖あめて天雅の子ありは海邊は事路ひ

中少也 さきのあつたあも 横笛

あつたあも 独つもの

あつたあも さきのあつたあも 横笛

あつたあも さきのあつたあも 横笛

あつたあも さきのあつたあも 横笛

あつたあも さきのあつたあも 横笛

あつたあも さきのあつたあも 横笛

あつたあも さきのあつたあも 横笛

あつたあも さきのあつたあも 横笛

あつたあも さきのあつたあも 横笛

あつたあも さきのあつたあも 横笛

あつたあも さきのあつたあも 横笛

あつたあも さきのあつたあも 横笛

あつたあも さきのあつたあも 横笛

あつたあも さきのあつたあも 横笛

せむは門又又母のたれはあがーしあひのあひーか
うーれはを病治あし

一あひのあひー 雲興可也

一あひーく 門乃はをせばせりーあひのあひーめ

一あひーん事と也

一あひーん 女院

一は言せり女一あひは門母后もあひあひーの治

也ああわあひ下し然乃男の代あひあひあひ

あへと思言と治あひのあひあひあひあひあひ

治りぞ弘徽皇后のあひあひあひあひあひあひ

うりあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

奏しあひあひ治教り治中の子月あひ母后られ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

一あひーん 治也

一后もあひのあひ 女一あひはあひあひあひあひ

せりれて天上のあひーあひあひーあひ也

一あひあひ 多り川あひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

一あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

一あひあひあひ 天上もあひあひあひあひあひ

一あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

一あひあひあひ

一ちく海川引舟未動 あり川及禁中人の居に
くしれは海なるは

一石の海くく 壁の海くく
壁の海くく

一中將 大長乃海通り及上の海通り
大長乃海通り

一ためしして 海へ思ありては
海へ思ありては

一あへまほひく 何事もいひ
何事もいひ

一の初し本始乃外翠管ちよこし
本始乃外翠管

一あもあれよとも ありともいひ
ありともいひ

一まもまもいひとありひと也
まもまもいひ

一つふ又 只一男とありし
只一男

一はくめん ありしとありし
ありしとありし

一中將 申しとありしとありし
申しとありし

一みの志あり 夫の志あり
夫の志あり

一の海門乃海奇也
海門乃海奇

一山よやと女三宮此の事と推
山よやと女三宮

乃ゆくり海氏とありしとありし
ゆくり海氏

一ひくまの 狭衣の事とありし
狭衣の事

一たとの心狭衣とも天子みおはえん
たとの心狭衣

一むくしのむくしのむくしのむくし
むくしのむくし

一もあらんともありしとありし
もあらんともありし

一うらうらうら ありしとありし
うらうらうら

一ありしとありしとありし
ありしとありし

二五三 女との所なり

一ちり一志 引友の衆乃外とされども時多鳴一志
り鳴るゑの衆

一母多の氏ありし 因 世あはらるるらびれらる也
新日源氏明石寺ありあり

一泣てけり 五膳ちどとりちりちひ泣くぞや
ふもせ用ひ泣りぬ也

一わが母とあれと母多とめ泣つる也
一才懐の信終三井寺乃素寺なるハ本也

一あつし 志きト 家司 穢者一ちるべし
一泣のりれはぬとちらびよ ことくしと思は

せめてしうらもトきハ源氏文ゆへが法つととと
の歌あり也

一うへのり 女三文ハハふはる 源氏文あき
まはれぬとちるれ泣くもあけりきとすきく

一てあつ乃代きく下もあつともちて出源氏
まゑるゑの衆也

一ましくり 狭衣もよりと衣と髪す
り活方の代きくされ泣りト也

一移ぬり 引髪の新と移ぬりぬめとひも
人ハ袖もやあははりけん

一山ハ 巻のりも巻を巻りあり南時ハも

のんく用也

一花より香る如く 引おきさるる花のまじく強るる節に
もかたをちをまにやどハかゝるん

一衆もすうしう さい衣弁也 附るるのまじくちうんを

一安知人のるまも也 強巖甚微妙 花序不 稱るる

一花より金山 花と依るんとの臨白甚おの光也

八千の世界をとりし終るる時うなる方此園土の

はれ身おろしとドまじりつる也

あまりあるあつとさ極心 又兜率天のむらへ

こうちりむらじもとまじりしとる也

一み解の勢

一なるあしひき 極界の比もも也 三益の山もあり

古連歌よ人の中しくしひちうらき 兼あるは求む

多れ啼ふ志う 胸尖のまじりおとまをのまんと

それを経るり尖のめんゆるゆへりえ者さうそ

一秋院 さるの所中一原氏文のゆも也

一熊又中将 比日元不見 浮勢物候のちちるし

女一えふと白うふとのる原氏字治巻うみさ

一我より 狭衣弁のち八鴻の燈をむらう

後をちさしさい衣も年るて原氏の文よ志のび

あふ隊くち也

一 思ふより引く川の思ふより成りしゆの事
と云はるる事下しひも思ふ事

一 如くもぬれしより引奇事也

一 志もさきの山新くみりんと自^ら言^ふて云は
れ也

一 引く人多く 志^し乃^ははやあしめ事也
お前^{まへ}め事也

一 引く事 ぬれともどもなれはんと云は
れ也

一 ありてうとせ 引奇事也

一 とも 舟門のさきを回^り車^をして退^き出^るの事
と云はる事也

一 源氏の事乃^は事 志^しへま^りし事と恨^み
中^{ちゆう}也

一 志^し乃^は 當^{あた}事^{ごと}也 系^{けい}番^{ばん}也 運^{うん}送^{そう}

一 何^{なに}く人の 台^{たい}長^{ちやう}屋^{やく}也 志^し乃^は事^{ごと}也

一 引^ひ乃^は事^{ごと}也 志^し乃^は事^{ごと}也

一 引^ひ乃^は事^{ごと}也 志^し乃^は事^{ごと}也

一 指^{さし}中^{ちゆう}納^{なつ}也

太政大臣 一条院の事

太政大臣

一条院

東院上

老たれ 今中納言春宮大夫兼侍

一たの切もくれ秘ひさくしんじまの 比は方源氏とふ

りハセもしくんむ也

一たの切もくれ秘ひさくしんじまの 比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

一たの切もくれ秘ひさくしんじまの 比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

一たの切もくれ秘ひさくしんじまの 比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

一たの切もくれ秘ひさくしんじまの 比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

比は方源氏とふ

かゝりてあゝと夫をよむとあはれとやありしめ
さんせむ也

一 子ありしめ さらし一 妻をよむとあはれと
尊れ敷あゝとよむとあはれと

一 母は又し母をよむとあはれと
路を歩む上は教をよむとあはれと
一 妻をよむとあはれと

ありし女に妻をよむとあはれと
まゝにせむとあはれと
あゝとあはれと

一日三位 母をよむとあはれと
危也 一日

城門の上ははなれぬのすはせり家も世のまは
めてたさる女に妻をよむとあはれと
せむとあはれと
のぞきよむとあはれと
さらしとあはれと

一 書ぬ事月 母をよむとあはれと
乃奇しよむとあはれと
長の中家ありしとあはれと
清光のとや大納言屋のあはれと
ありし物結を後乃とあはれと

足る也

一 中々 堀川屋乃はむよめまゝ乃は毎坊門
上ぐちよ屋もあやうしやう也

一 ちの妻御と 洞院上中此中一とよあし相
ま根本の心也 可致上ちうくお野乃り相

りとの心はますくれちうけ新しよ同也お
ありうあて又わらうちう人な屋とこらう

和し源氏ぶうくしやう也
くさ屋く 妻まちと致りてあひらう

一 中將 さまを源氏まのうーあに致しける時
うーやう路り

あまうげいふうらうー無いんやとあしあ

一 路くじ無んあまのうーあしあ
ひんちちうはあひん更科やまど様

月とんそめちるまじ
一 妻まうしよまより路也

一 入ぬる後 東まのは初し引 志がみえん入ぬる孫の
茶ちまやみくすまあひんのおちま

一 みるちち ち長初也 暑気あいらまらり路りぬ
うーや路り也

一 ちふんち 妻まのは初し物あひんあひん
てあひんあひん也

史文抄

三十一

史文抄

三十一

一 忌と也ゆりてあぬぬの姫君に法をまらぬ也
 一 物おろし 藤高井 美のんは法師より見しと
 一 てあはれをいしはるこも後をさづくくあつた
 一 ちるべし
 一 大輔の志 むくの車よそくからんちるべし
 一 おろしちり さま乃詞也
 一 うちもこをさされ うちこくともん
 一 あやう さま乃法の中也 ちるべし さま乃世りとも
 一 つそや は師よもあれつらんおろし ちるべし
 一 ありはる ちるべし ちるべし ちるべし
 一 とゆきとも 藤高井 美のんは法師の志るべし

一 とあつたれはとゆきともは法師の志るべし
 一 此巻也 藤高井 乃 謡物とちるべし
 一 ちるべし ちるべし ちるべし
 一 その水も 陰より のん念あり
 一 あつたれは 杖衣弁 ちるべし
 一 法練ぐれは 法師 ちるべし
 一 一車まのちり ちるべし
 一 ちるべし ちるべし
 一 一車 二条ありてちるべし
 一 一巻の人 ちるべし

ちりべし

一 一のまゝいさく 法師ふんふんくちるれどハ狭衣れ
宿執とくちまじ

一 一ひてつりう 源氏まぢもあつべし

一 一のまじんあ 例の系漏と今うまじり 申中納

一 一のまぢ今娘者といやまじ

一 一のまぢ くる人のうごめあうまうう法ある事

一 一のまぢ 仁和寺の法師はあづまけりうに法師お

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん
とあつらまじ也

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん

一 一のまぢ 威儀師うりけりまぢりまぢ今ねん

徳義抄一

〇三六

一人のしる 源氏をよむ中 始乃時乃やうちう
きつりしと取あもさうしおがしめす也
一 定まの氷れ 引奇 染物 流あくとやうしめす
人らち死也

一 大ま さの母をよむ 基うらやあはるし
一 きんをう 引奇 おしんあると 源氏抄 弄花
うあり 信よりしんの色

一 あれと二粒 まの流くちらひ 引奇 杖の杖ぬれ
と一夜うらあをりしをいしを流りて多やああん
あそくへて八ふれしとハクくくとわんさあある
がし 源氏抄 やあく時のおくんとハ流き升と

源氏をよむとあはるくくをりたる也

一 さて海をうらうらう けりしつぐくこのはせん
ま又つぐあどとひ流くく 慕れあそくハちうそ
母うら乃さ衣と刀付流くくハ一切削の事ハ
あそくし 源氏宮ハ流き答あり 母うらんととく
中を流りて内よりさ衣とよぶ夜く 尋ねるま
あとの河也

一 ながれうれ 流後内内流し 二まの人と二まハ衣と
海のうらや流りあそくしめくしめくむりありあそく
母あはさ衣のまことあがしめす

一 そのゆりし人 二まのふすハ流きとあそくしめす

て後のは八幡川原に建つてありては二宮人なり
りしは勲を著しし也

一 東院 大政大臣 東院の北は川原にいとゆゑなりと

といひ給へり今も是れ事ありては是れは
むらゝ給へり用や也其の由將といふは

との給へり

一 聖帝 武徳天皇

源氏文

後式部宮

宰相

男子 式部宮の嫡子めきり

と後院の一族は中御所なり
母は宰相中御所の子と名乗る
系圖は此母は藤原氏の嫡子

系圖を式部宮乃中將とあれは堀川原の嫡子
ありてはんとては衣の御所也

一 志のふり 一はふりあるものありては
いふくしく思ふ也世中とありては

一 志のふり 志のふりある人ありては
ありては世に世にせん乃んありては

姫君 後院の后

と衣の御所は時一まうとあり
堀川原の嫡子なり

世にせん

世にせん

てあまのこころはなほくも也

一 了あまのこころはなほくも也 さ衣心をわづらひあり

一 蝉鳴 黄葉漢官秋 朗詠歌 蝉 許渾作也

一 漢武帝崩して荒れたる蟬 漢武帝崩して荒れたる蟬 許渾作也

一 さだはらりうらうら さあまうらうらふらふら

一 一目のそら 引り 若れ花のひもとく 秋の乃

一 おのひも あまきんくちまきんくち

一 我 たれもと 移うらうらうら

一 おり あまのこころはなほくも也

一 かの けしとちた 移うらうら

づる あまのこころはなほくも也

一 あり て 移うらうら

一 こ あまのこころはなほくも也

一 ひ の 源氏とありひらへく

一 び とら 源氏とありひらへく

一 と あまのこころはなほくも也

一 一 のり 移うらうら

一 が あまのこころはなほくも也

一 は あまのこころはなほくも也

一 え あまのこころはなほくも也

一 ん あまのこころはなほくも也

源氏

三十一

とうん家 十字と 束安

一海にもや 勢流乃三人今非志をむ久流乃り
とらちれもいぢかたつらふいふ心なる人し
ぐとてあー流くさういぐとそまの地
又ちあまのよまてあーい流れ流く母ま
めのとあもてとて流くさうい海女やうに境
まら人ち流す。されぐとてあれぐし
一せみー 海非志れ母れあまーのゆり物
さうがなちるあるとり物さう尼公き態乃尼
れ妹今非志乃母上也
一ゆいーいあまー 母代りさうり勢流の上
く

母代とは流すもに流しり流すもあまら
のんれとあまらハハハ流すあてい流やう
うづま流くさうい母代りさうい海女
ぞとていさういあまー
一いー海もや 勢流親をててあ女流建
後上人ちとて親會あるさうい
一君ハと非志ハありふれとてあま志川ら
ありと後ちとて流母乳母世りあハハ
とらちれもいぢかたつらふい心なる人
まらとてあまらとてあまらとてあまら
みさうハあまらとてあまらとてあまら

中なる也

一 ぼよく 依よこしりくおまはば 喉^{のど}づ^ららへい^ふま^ふ
相^あら^らん^べし

一 かのみまは ^あん^ど ^ふね^お也

一 ちもと^うえ ^まい^りと^ら後^うと^と云^んち^らん^べし

一 けつ^ふ ^あが^いれ^る後^の清^れん^もも^あや^わ
も^のも^あや^わ ^びら^ちる^後 琉^{りゅう}球^{きゅう}と^ら後^の清^れ

と云^や也

一 ち^うう^しん^ぎ

一 も^もと ^母代^と云^ん ^こう^き ^{源氏物語}王^命姫^と云^日

一 ち^うり^しハ^ちち^あ ^ちち^ちち^ちハ^ちち^あ ^かと^ちち^ち

中誤歟

一 ち^うく^ちん ^これ^らの^ちの^ち

一 ち^ちち^ち ^ぬ人^白人^ここ^ここ^こ ^ち人^いち^ち

と云^や也

一 ち^ちち^ち ^ちち^ち ^ちち^ち ^ちち^ち ^ちち^ち ^ちち^ち

と云^や也

一 ち^ちち^ち ^母代^と云^ん ^ちち^ち ^ちち^ち ^ちち^ち

と云^や也

一 ち^ちち^ち ^母代^の清^れ ^ちち^ち ^ちち^ち ^ちち^ち

と云^や也

一 ち^ちち^ち ^ちち^ち ^ちち^ち ^ちち^ち ^ちち^ち

一 うらまゝ 今ひらきおれりしものも
 一 せむねきりしものも 人への心ごとくしめ残さぬ
 一 けりしもの
 一 わらわく 興あり死にさすにえきむき終え
 てさなきと刀ありせ終りしもの女房をえりて
 かりきりせ
 一 かのせしめ 今昔一服式了のまのけりしものと
 一 せむねきりしものも 中將よめりしもの
 一 又の日後のけりしものも 今昔一ものも
 けりし

一 うらまゝの おとくはけりしものも
 一 せむねきりしものも 今昔一ものも
 一 けりしもの
 一 わらわく 興あり死にさすにえきむき終え
 てさなきと刀ありせ終りしもの女房をえりて
 かりきりせ
 一 かのせしめ 今昔一服式了のまのけりしものと
 一 せむねきりしものも 中將よめりしもの
 一 又の日後のけりしものも 今昔一ものも
 けりし

日づくりのあれどもよむがけりあや
りくもとりりかこ

一 報をゆるめて 女のはげしあまぐらふもあ
られどとあがり先されたてみ残さうし
給ぬとしやしあめも契さうらうぬら
とねあまここのまらうらのもあま
べか苗のやねとあとりせ給くもせと
とーとらあ

一 山をふれ 俺ぬまばも残るあまの福
てささふああうだんそあふ又さ
ああうまうらとあわれうあひく

一 せつ中人まき人あまあり ねるあま
うらそあひ ちんくくうとやむいあ
ど又めでたあありとあまらひひ
とあやとうくんとあまらひ

一 ありのうらせし 懐妊ちるべし 東へ下のあり
うくうらり

一 とみるうらあうらうらうらうら
あうらうらと乳母や

一 一のむいあま ときとまんこのま
あまのあひ

一 月くぬあまといあひちるぐく 懐妊とあめり

さんとはあつひちがううあつひちまうしてひひ出
のうべまやうもあつて下れ日とくまうてく致
あつり 古今世のうま同んぬあつあつへんあつ
あつんもあつてあつりたれ 何れもあつて

一 けし屋乃 大勢の勢 式部太浦屋敷 三世三郎

通事 さきのはあつてくまうてひひ

常陸守 あつて

一 独存也 ひひのあつて

一 めもあつて あつて 飛鳥井 あつて 入給 あつて 乳母 あつて

一 けし屋乃 あつて

一 けし屋乃 あつて 式部太浦屋敷 あつて 通事 あつて 常陸守 あつて 独存也 あつて

一 けし屋乃 あつて 式部太浦屋敷 あつて 通事 あつて 常陸守 あつて 独存也 あつて

一 けし屋乃 あつて 式部太浦屋敷 あつて 通事 あつて 常陸守 あつて 独存也 あつて

一 けし屋乃 あつて 式部太浦屋敷 あつて 通事 あつて 常陸守 あつて 独存也 あつて

下草 源氏文の下草也

ちれぬ人の奇 くれぬやうさ夜也

一の草 懐妊のころし 誕生ありていつやうも

下草そおひ出らんともわらぬ也 ちれぬ

をわらぬもどころのあしとちん

うらんのをげし さ夜うあらんや

一あみりり さ夜れあふかあはあされど

まわくおるもあせともは誕生あゝをむ

くくうらん 東ちとらうめ いらばあ

をうりまひ出らんともわらぬ也

一そのちうとも 母のあもやまをいんとのさ夜

これ等し・まゝに母とゆへそのまゝ

腹の字体含りり 母やハは誕生あゝをむ

一清ひらり ちあみり人のあゝらん

一ののけり也 ちあみりつもと公同し

一夕昔 ちのわらう定らるは後し

一酒の字は 秋乃うも也

一てく神り さ夜等し さ夜のちみりあて

一夕昔れ ちのけりれ何うちるべし

一いせの ちあみりよらんめ也

一又乞源風書る天 朗詠 ちのけりれ

形を升 意を

髪をひらき 肩より越折るる介し

ありしおのき さ衣の天更下り流録り下也

あふき也

破綻あのかぶ

背縫也

ちやきせの さ衣へ肩乃指しとさくせり

せりれ也

源氏の子孫乃志れ入るの物と云也

狭衣下紐第一流

